

平成 30 年群馬県立自然史博物館活動の評価について

群馬県立自然史博物館専門委員 小田川浩道

群馬県立自然史博物館に初めて入館したときの驚きを今も鮮明に覚えている。常設展の狭いエントランス部分を抜け、吹き抜けの大空間に出た瞬間に飛び込んでくる巨大な恐竜の骨格標本。大型獣の剥製。群馬県の自然の豊かさを教えてくれる標本の数々。すごい施設が群馬県に誕生したと感動した。

だが、開館から 23 年。博物館という施設の性格からか、情報化社会の進展とは無縁のごとく、展示は何も変わっていない。ただ、空調など設備の老朽化、年々増える資料で埋まった収蔵庫、経年変化による展示物の退色などに歳月の経過を感じるだけだ。

日本経済の長期低迷で、地方都市に設立された科学館や博物館などは一様に予算と職員数を削減され、展示物はリニューアルすることもできずにいる。しかも、自治体からは知恵を絞ることで、入館者数を維持または増加させるよう努力を求められてきた。

こうした状況は群馬県立自然史博物館も例外でないだろう。それでも平成 30 年度の入館者が前年度比 1 万 5 7 9 2 人増え、過去最多の 2 8 万 4 7 5 4 人を記録したことは高い評価に値する。アンケートによると、リピーター率は 63%。満足度は 99% というが、これで良しとせず博物館の魅力を高める努力を継続してほしい。

もとより博物館の使命は資料の収集、研究と同時に、県民の知的好奇心を刺激することにある。その意味で、県内で見つかったイルカ類化石が学芸員のたゆまぬ研究で新種認定されたことは、県民が 1150 万年前にさかのぼって郷土の成り立ちに思いをはせる貴重な機会を提供した。

採集・寄贈など年間 6000 点を目標に収集する資料は、将来の研究資料として保管するだけでなく、企画展などを通じて少しずつ公開していくことも必要だ。

2018 年には 2 万匹の昆虫を使用して作られた板倉町の昆虫千手観音像が話題となったが、思いもよらないものが関心を呼ぶこともある。職員はアンテナを高く張り、県民が足を運ぶような企画を考えてほしい。併せて開館 30 年を見据え、長期的な視点で施設の更新を進めてもらいたい。